

あ
く
び
の
泪

序 歌

あ
あくびより湧きいでにたる一滴の
涙よ頬に春を輝け
目

大正十三年十二月

俺の監房の窓からは、高屏とひさしの間に、
わづか一尺ほどの空が覗かれるばかりだ

しみじみと嬉しかりけり星一つかかるすき
間の逢ふ瀬と思へば

キラキラと笑ひてやまぬ星一つ見飽かざり
けり魔子や如何にと

大寒と我れの寢息と戦ひし明けの硝子の曇
り嬉しも

たわむれに吐きし息吹きの硝子戸に凝るは
涙か凝るは涙か

運動場へ出つつ

今日はまた編笠越しに見ゆるかな宵空遠く
晝の夢月

運動場の塀にもたれて

陽を浴び、つしじまに夢むこのころたまさ
か見ゆる晝のあの月

ともすれば淡き夢追ふこのころ嘲ければ
とて憎くもあらざり

星見えただだ味氣なき夜なりけり寒く石嶺
をそと嗅いで見る

東京よ夜明け夜明けの音楽をちと聞くごと
に力覺ゆる

もの音の世界——二首

忍びやかに聲む靴音のそれぞれに人の心の
相を想ひつゝ、

盲ひたる人の如くにももの音の世界は我に深
まさり行く

懐ふいのち

明けなんと薄水色に流れ来て寒むざむ壁に
漂ふ生命よ

鶏に白み雀ほのぼの雲裂けて鴉鳴きたる今
日を喜ぶ

囚車の金網より

濠端の眞冬の風に吹かれつつ少年の頬の燃
ゆるは嬉し

騎馬巡查あまた行き交ふその中をわが囚人
の自動車も過ぐ(赤坂離宮前)

彼女の歌——七首

淺草の頃

得飲まざる我れを嘲けり「飴ちよこを甜めて
居なよ」と酒をあほりぬ

「あたいだつて本を讀むよ」と投げ出しぬ霞
お千代が出双をかざす繪

ぬばたまにほのと浮べる辻占の紅提灯を見
つめて答へず

病院に行きは行きしが苦が藥皆な捨てたり
と言ひて嘆みぬ

妻沼の里

惡毒にくずおほれたる體よりなほ巻き舌を
強く放ちき

村芝居掛ると言ひし若者に爛れし顔をどう
だ行かうか

意地に生き意地に死したる彼の女の強きこ
ころを我悲しまじ

大正十四年一月

その夜の歌

一九二五年一月二十三日午後三時、突如、部長來りて村木君病ひ危急と告ぐ。直に、靴音に守られつつ病監へと急ぐ。我が監房より遙か隔たれり。

友の病ひ篤しと聞きつ急ぐなるこの足下の土の冬風

衰へを偽りかくす勢ぞと眺めしことのあはれ違はず

噫!! 友の面貌……。枕頭には獄醫、部長、看守、雜役夫、布施氏、山崎氏、沼判事など雜然たり。

その瞳はや甲斐もなし我が血潮通へと握る手もつれなかり

激しき振撃来る——。今日、午後より數回起ると雜役君の教ゆ。

喰ひしばる齒の間より流れ出づ苦るしみの痰血のまじる痰

ぼろぼろと涙落ちけりわがなみだまだ枯れずして残り居にけり

古田君馳けつく。布施氏と沼判事との交渉なりて貴附出獄と決る。

世を隔つ煉瓦の底の鐵窓に病みて消えゆく友を見つむる

赤錆びに似たる光りの慄ふなるすすけし電球に我れ眼牙ゆ

お伯母さん来る。續いて奥山先生、山崎氏と共に馳けつけらる。……この上は、ただ自動車の用意を待つのみ——。

心やや落ちつきにけり病監のかかる障子も和みおぼゆる

病む友はひそと眠むれり雜役の尿の響きも安けしと聞く

やや經ちて、自動車の準備に出で行きしお伯母さん歸り來り「運轉手は病人を乗するを拒みてきき入れくれず、今また、白山より寢臺自動車と呼ぶことにせり」と悄然たり。古田君と眼を見交はして恨みをのむ。

白山の方ぞと見つむ眼の前、多ざれの庭曠野とおもほゆ

再び振撃襲ひ来る——。意識は既になく、手足も次第に冷え行く、ああ……。

苦るしみの餘音か知らず天井の暗きにふるふ蜘蛛の破れあみ

寢臺車来る。午後六時也。廢架を守りて表門の廣庭に出づ。星二三見ゆれど四邊暗く、高木に悲風聞ゆ。寢臺車に移す時、またまた寢臺起る。うす闇の中に山鹿君の顔を認む。安谷君の聲も聞ゆ。自動車出づ……。さらば村木よ!!

永遠へのこれが別れと冬の夜の獄庭の闇に眼燃え居り

監房へ歸り行く……。遙かの庭の暗中に古田君の聲あり、「大切にしまへ……」

監房に歸りてぐいと呑みほせし一と杓の水寒冷の水

二月

たらたらと雪しづくする遠近の軒の音楽眞晝なるらし

電燈のまたたけるさへ面白し吹け吹け風よ
狂へ生命よ

窓によりてしばし雀の轉りを口眞似るれば
こころ満ちにき

あたたく布團干しにけり枯芝のこの移り
香に早く寝まほし

自動車に揺られても酔ふ衰へは獨り冷めた
く笑むほかになし

梅白ふ頃とは知れどこの庭の蔭には月も宿
らず

あれすさぶ煉瓦の屑の庭の面に春を待つな
りくろがねの窓

壁に映る髯を可笑しみさまざまに見やれば
ふふと笑ふ影法師

恨知らば壁に宿れよわが影ときとにらまへ
てふき出しにけり

老嫗のなさけにも似て灰色の空ひとところ
銀くなごみぬ

寤めがてのうつつ心に眺めけり遠ざかる壁
せまりくる壁

三 月

霜解くる運動場のぬかるみに鳩の胸毛は踏
まれてあるかも

かく伸びし爪われにあり泥苔の庭の瘡蓋搔
きむしりたし

飛行機の祝砲の春の大空を嘲け眺めどとき
めくは胸

灰色の雲ほの紅く牙え出でて春の白塵舞ひ
昇りけり

空の狂ひ——二首

うららかな空たちまちに白玉の霰を亂しは
たた神鳴る

無爲を破る狂ひかしらず大空のかかるむら
氣は懐かしきかな

鼻毛ぬくこの快心よさ朝の窓をおほきく開
き東風にあまねし

濃き藍の空暖かく囚人等朱く浮べり大屋根
を葺く

春日さす囚屋をめぐる高垣の花崗石にもき
ららへるもの

ねばねばと朝ぐもりけり二本の樹の枝芽ぐ
む力こもりて

いや重き木の芽曇りに包まるる默しの窓の
我が眼鏡かな

痔の病

紅ひのいのちの血しほ滴りて落つあした淋
しく薄かすむかな

生きにうるむ大空なれや暖かく濃き藍なれ
や眠ぬるるも

うらかな空を仰ぎつほのしろき月をまさ
ぐる我れのこのごろ

母を憶ふ——三首

古土瓶洗ひて居ればたわいなくぼろと缺け
たり母を憶ひぬ

くるしみを齒にくひしばる癖のありし母の
その齒もいまは亡せけん

眞ごころに神も佛も拜み得ぬ母の産みたる
汝ぞと泣かれし

病臥——三首

一碗の冷めたき粥を手に載せて春のしじま
の底に坐りぬ

菊の芽のやわ葉を摘みてそと上に置かま欲
りする粥の色かも
梅干の核を噛み割りうす苦がき乞ひ嬉しむ
病みてありけり

四月

春畫蕩々

欠伸より湧き出でにたる一滴の涙よ頬に春
を輝け(運動場にて)

庭草——三首

煉瓦屑うつめし庭も四五本の草萌え出でぬ
あわれこの草

おち憚ふ少年囚のあの眼あわれこの草など
忘れめや

かくてだも生き聞へる春草の心が胸に響く
夕日かな

獨房の安坐に馴れし膝骨の身動く毎に鳴る
が淋しも

ある日

たわいなき憶ひに遊ぶたわいなき我を見出
でて可愛ゆかりけり

神田伯龍を憶ふ——三首

伯龍の河内山などいま一度聞かまほしかり
春の沫雪

伯龍の小夜衣草紙聞きし夜を柳の雨に濡れ
たりしかな

道學者面らをなし得ぬ伯龍を嬉しと思ひ忘
れかねつも

寝ぬくもる胸のあたりを愛で撫づる春の夜
半を鶏が鳴くなり

運動場にて——三首

うす白き三味線草の花の上にそと眼を落す
看守なりけり

雞房の人等罪なく語り合へりこぼれ生ゆな
る大根の花

こぼれ生えて咲く大根の仇し花囚人は見る
看守はも見る

春深し——二首

屋根裏に雀が崩す土の音かそかにひびく春
深みかも

春深かみ空のしじまを眺め居れば眞白き鳩
のむく毛落ちくも

春の朝の光り波だち雀等はむれ交み居れり
高き双樹に

日 永

ほうほうとうつけごこちに聲低く雀を追へ
る窓もありけり

運動場にて

東京小僧、吉原、死、など書き刻む煉瓦の
塀に櫻散るなる

友病むと音信ありけり一本の瘦せたんぽぼ
の庭に咲くとき

四月は盡きんとすらし一本の瘦せたんぽぼ
よ霞みても消え

冷やけき窓のくろがね頬に當てて若葉の雨
に暈すむなり

さまざまの文字のありたる太柱けづられに
けり若葉となりぬ

五

月

八重櫻はろほろと散る枝深くじつと動かず
孕み雀は

孤坐 黙照

面白や雲と漂ひ水と流れ壁を動きつ我れ包
むもの

桐 の 花——二首

雀の音風に散りつつ桐の花さやかに咲きて
本を待ち居り

桐の花に朝の風吹き牛乳を飲むはよろしも
獄屋禮讃

夫君の病を護らへる望月福子さんに

手洗ひの水にうつろひ淨よ澄める青葉の影
を祈る君かも

濁れる夜——三首

監房に泣く男あり淋しさの心いらだち憎く
てならず

すり潰す南京蟲の悪る臭き匂ひを我れを嘲
けても見る

年々の南京蟲の血の跡の黒き笑ひが我れ圍
む壁

六

月

雨に啼く鳩——二首

鳩啼いて怪しき沼の底深く我をいざなふ雨
暗みはも

ほうほうと鳩が啼くなりほうほうと老ひ朽
ち果てし父が呼ぶなり

降りしきる雨に音なく塀外の樹の一葉だに
動かぬものを

經を讀む監房もあり濡れ苔のほのと匂へる
庭の旭ざしに

寂しさを雨の樹がくれふと啼きし鳥とは思
へど蜩に似て

樹がくれに一聲啼きし寂し鳥戀ひつつ待て
ど五月雨るのみ

今日はまた梅雨ぐもりつつ鈍き日の漏るる
を眺め懶くてあり

空ろなる頭叩きつ放心の口を開けば涎れ流
るる

夕餉後の茶碗洗ひつ眺めやる梅雨の晴間の雲の峰かな

夜具伸べて窓を見やればほの青く暮れ行く空に白き雲あり

ただひとり青海原に浮び寝て仰がま欲しき雲の峰かも

淡碧の夏の夕闇しづけしと榎の蝶の白く舞へるか

雀の歌——四首
大いなるバン屑一つ毬のごと跳ねて遊び雀五六羽

幼きを飛び習はする雀等に戯むるさまの白き蝶かな

びつたりと塀にとまりし嬉しさを首うごめかす雀もありけり

馴れて来る雀なりしを帶劍の男はむづと引つ捕へけり

悲痛漢健在なれ！
哭すかと思へば唄ひし爛腸の彼れが行衛を知るや灯の蟲

公判廷にて——三首
うち集ふ友と相見て笑み交はす法廷ゆえに樂しかりけり

裁き給ふ尊き顔の鼻先きへひよいと飛び乗る蠅欲しぞ思ふ

言ふべきは既に言ひたりいまはただ親しく笑みて別れなん友

歸 獄——二首

夕闇の窓を仰げば病む友の青き手見えぬ歸へり居るらし

去年の冬刑死なしたる友の居しその窓にいま病める君はも

死刑を求められて——二首

お茶番に終りしことも死の刑を受けていささか意義を深めん

じりじりとなしつくづしつ殺さるる無期の苦痛をのがるるは嬉し

落陽は殺人囚の室の戸を赤々染めて笠しづかなり

鐵窓に攀ぢぬ叫びぬ大いなる落暈^{おろしづ}狂ひつ沈まむとする

七 月

ゆるゆると流るるいのち雀等と共に起き出で共にねまりつ

運動場にて——二首

いちらしく小さき草の白き花觸るれば夏の露こぼれたり

ただ獨り何をか夢む夢ならぬ男歩めりぐるぐるぐる

蠅の眼も牡丹の色の珠のごと輝くものをさせよ日の影

炎天を一群の鳩光り飛ぶ窓に向ひて體操をする

炎天地獄（運動場にて）——二首

鳩の糞べたりと浴びて黄金の息の苦しき
かたばみの花

かさかさわぐら葉一つ山蟬のゆき交ふ塀
に觸れて落ちたり

滴々と胸の血汐に零くなる未見の友の音信
もあり

深山路をさすらふ友よ我が窓はいまとほど
ほに夕蟬のなく

とぶ蟬の聲默然と聴き居しがいつしか微々と
我れ笑めりけり

此のころ如何に告ぐべき朝やけの空見惚
れつつ茶碗を洗ふ

寂——三首

夕日景にぶく名残りし監房の隅ひとところ
見るとなけねど

韻々と雲夕焼けつ移り行く眺めこのまま夢
に入りたし

夢を喰ふ獏は知らずも我はいま寂寥を食む
獸なるらし

窓——三首

幽栖に夏籠る人のあるものを簾かけたるく
ろがねの窓

簾もる日の景の綾さざめきつ碧襲集を過ぎ
らむとする

古簾巻かむとすれば陽の匂ひこもるか蜂の
去りもあへなく

病めるしげ子君に——三首

君はまだ癒えずもあるか枕上なく夕蟬は寂
しきものを

駒込ゆ千駄木わたりよるふかみ蝶姑なくち
むかやすしすらむか

明け易き風吹きわたる庭草の露ちりぢりに
熱の消めやも

檜——三首

くろがねの窓に竝みたつ瘦せ檜伸ぶる夏芽
か青き吐息か

ある枝は夏芽を伸べつある枝はすがれつ生
へりあはれ檜も

山の奥のおくべともずり火吹くてふ姿を思
へよ瘦せ檜汝

夜の暑さ——四首

寝苦しくそと起き出でて水惜しみ汗拭ふ間
も蚊のよせてけり

かかる夜は窓の闇さへ重油を湛えし如くぢ
つと動かず

眞白かりし敷寝の布も四五日の夜を経て蟲
の血に汚れぬる

寝苦しくまた起き出て飲む水の温めるさへ
や臭ふ柄杓に

いねたらぬ眼痛しも窓の樹の旭きららに蜂
あそび居り

衣ほす女監の庭ゆ日盛りて朱あせごろも照
らひ乾にけり

運動場へ出てつ

幾たびか洗ひて褪せし白夜着に枯々て落つ
桐の花はも

月

待宵草のほかなる花を押せる文、しげ子君
より届く。薄き黄もて描きたらむ蝶にも似て
押花、いと興深し。

押花の待宵草は露匂ふ夢の胡蝶のそれにか
も似て

涼雨いたる
雨ながら鳴く蟬涼し眞白なる敷布をのべて
樂々と寝る

南京蟲——三首

しき布も柱も本もいや臭み南京蟲の血なら
ぬはなし

血に酔ひて足もそぞろに歸り行く南京蟲の
憎く可笑しも

夏の夜は早や明くらむか血を喰ふ南京蟲の
影し消ぬれば

夢醒めて魔子を想ふ——四首

筑紫潟沙吹く風にくろぐろと染みて唱へる
魔子を夢みき

海を好み唱ふを好む快活の魔子が友なれ筑
紫海鳥

幼けなき妹の二人と父母の墓石立つ濱に今
日も唱ふか

逗子の海鎌倉の海手をつれし父母はいまさ
ねその西の海

雷——二首

稍妻の明りに見ればいかづちの鳴り響くと
き躍る白雲

はたた神鳴るを嬉しみ高山の草木繪葉書立
て並べけり

朝の月——五首

いやひさに月は見じかも雲の穂の薄きに透
きてここに朝月

黒き蝶の夕べあやしく飛びにきと想ひつ朝
の月遙かなり

虹のごと橋を渡せる薄雲のいみじきろかも
朝すめる月

朝すめる月隠くしてはとぶ雲の風のゆらぎ
にゆるる蟬の音

朝月の窓の檜の木に呼びかわす名しらぬ鳥
よ戀深みかも

燃ゆる日車——二首

日ぐるまの花燃ゆるなり分房に狂へる人の
窓の暗きを

病む人は背負はれ行きぬ日車の花の光りに
眼をつぶりつつ

朝露の檜の木が空にあきつ泛く羽ぬれの色
の佐びしきろかも

鯛の夜明けごこちは饅え臭ふ汗もそのまま
乾き行く肌

朝早く運動場に出づるは路し——二首

泥を吐く我は鮒かも青葉散る旦の天に深く
息吹けり

朝風の運動場に青々し落葉をひろひ頼ずりにけり

旅路の友より繪葉書を送り来る、うら寂しき

諏訪湖の夕照なり

諏訪の湖のきらら夕波綾なせるあやの思ひに耽けれと言ふか

蛸鳴き出づ

夕波の諏訪の湖邊にものを思ひこの蛸は汝もきくらめ

幽愁の悲しくもまた樂しきを知る身となりぬおかし獨り居

夕べのみ窓より漏るる日の影の色にも秋はしぬびくるらし

藍深き空に三日月現はる

船と浮ぶ黄金の月に掻き鳴らす天つ調べか蛸の聲

今朝や秋檜が下の水溜りは窓のくろがね影澄めりけり

桃色の薄雲の幕かかけつつほほ笑み出づる白銀の星

秋 簾——二首

まだすだれ秋となりけり啞蟬のひそかにとまりいつしかも去る

秋簾しづかに垂れて押花の干からび草をなつかしみ居り

窓の檜の花つけしは女檜なればと聞きて

紡績の女工のごとく蜘蛛の巣の白きを被ぐ花檜はも

九

月

むくつけき花にしあれど女檜と聞かばやさしもあが妻にせん

吾が妻の花の檜はおどろおどろ窓をへだててうらやつれ居り

白机南京蟲の血の跡の消ぬわびしさを秋の雨ふる